

1 痙縮について

(1) 痙縮は脳卒中の一症状

痙縮（けいしゅく）とは筋肉が緊張しすぎて、手足が動かしにくかったり勝手に動いたりする状態のことをいう。脳卒中の後遺症でよくみられる障害の一つである。痙縮では、手指が握ったままとなり開きにくい、ひじが曲がる、足先が足の裏側のほうに曲がってしまうなどの症状がみられる。脳卒中の発症後、時間の経過とともにまひ（片まひ）と一緒にあらわれることが多い。

痙縮の定義については、医学的に常識となっており、多くの医療機関のホームページ情報サイトで、患者向けの解説がされている。

例

札幌医科大学医学部リハビリテーション講座

<https://web.sapmed.ac.jp/reha/clinic2.html>

痙縮（けいしゅく、痙性ということもあります）とはなんですか？

脳卒中や脳性麻痺など脳の病気や、脊髄損傷やALS（筋萎縮性側索硬化症）のような脊髄や神経の病気などで、筋肉が緊張しすぎて、手足が動かしにくい、首や背中が反ってしまう、勝手に動いてしまう状態のことです。

痙縮では、手指が握ったままとなり開こうとしても開きにくい、肘が曲がる、足先が足の裏側のほうに曲がってしまうなどの症状がみられます。

下肢（足）：太ももの裏が張って、膝がのびにくい。

うちもも（内転筋）がつっぱり、おむつ替えがしにくい

ふくらはぎ（下腿三頭筋）がつっぱり、歩きにくい

(2) 痙縮の原因

痙縮の原因是、以下のとおりであり、不活動状態は全く関与していない。

反射は生物にとって必要ですが、バランスが取れるように調整されている。反射を抑える命令も脳から伝わり調整に関わっている。

脳で筋肉を動かそうと思うと、命令は脳で加工され、脊髄を通って脊髄にある運動神経に伝わり、運動神経が興奮して筋肉が動く。脳からは抑制性の命令も届き、腕を曲げる時は腕を伸ばす筋肉に力を緩める命令が届く。

脳から運動神経までの経路が損傷されると、脳からの信号が届かなくなります。動かすための命令が届かないと筋肉は動かなくなり、麻痺する。抑制性の信号が届かなくなると、反射を抑えていた信号が無くなり、脊髄の運動神経が勝手に興奮して筋肉が動き、痙縮を呈する。

脳から脊髄のどこか（あるいは両方）を壊してしまう病気やけがは痙縮の原因になる。

外傷による損傷、血管からの出血による周囲の組織の圧迫、血管がつまることにより組

織が壊死する梗塞、神経が変成してしまう疾患、脊髄の通り道の脊柱管の変形などで経路が障害される。

2 廃用性症候群について

廃用症候群とは、「身体の不活動状態により生ずる二次的障害」として体系化された概念で、不動(immobilization)や低運動(inactivity)、臥床(bedrest)に起因する全身の諸症状を総称する。廃用症候群の要因は、主に内的（一次的）要因と外的（二次的）要因とに分類される。廃用症候群の症候は、筋骨格系、循環・呼吸器系、内分泌・代謝系、精神神経系など各臓器の症状として多岐に現れ、日常生活自立度を低下させる。

廃用症候群の要因

- ・内的（一次的）要因：罹患している疾患に付随した身体症状、精神症状により不動の状態が続く場合（例：麻痺、疼痛、息切れ、抑うつ等）
- ・外的（二次的）要因：外部環境が身体活動を制限しているために不動の状態が続く場合（例：ギプス固定、安静の指示、介助者の不在等）